

幼児期からの美術鑑賞教育の実践と効果について

—ファミリー・アートプログラムの実践報告から—

林 有 維

1. はじめに

本稿は、家族向けミュージアムツアーと、鑑賞と制作を行うアートブッククラブの実践活動報告と効果について、報告と考察を行うことを目的としている。近年、日本でも多くの美術館が子ども向け／家族向けの多様な企画を行い、まだ研究数は少ないがファミリー・プログラムの研究や実践報告が次第に挙げられるようになってきた¹。学校教育においてはアクティブ・ラーニングの推奨に伴って、鑑賞教育が授業に取り入れられるような動向が活発化し、美術教育への大きな変化が感じられる。小学校学習指導要領解説（平成29年7月「図画工作」）では、『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善の推進について述べられており²、能動的な学びへ教育の方向性が向かい、美術鑑賞教育もその一端を担っている。

とはいえ、拙論³で問題提起したように、日本の美術館の作品鑑賞に関する企画は、予約制かつ抽選で人数が限定される場合が多く（欧米の美術館の教育普及にかける予算規模や人員と異なるため当然だが⁴）、アクセスしづらい現状は存在している。学校単位で訪問するプログラムも盛んに行われているが、低年齢期からの取組は少ない。保護者がミュージアムに子どもを連れて行った場合、その子どもが親になってから自分の子どもをミュージアムに連れていく確率が高いという報告もある⁵。また、科学技術館のアンケート調査研究では、博物館の体験の多さがさらなる効果につながる可能性を示唆している⁶。

幼児期から子どもと保護者が美術館を楽しめるきっかけを作るために、本稿執筆者の主催する団体「子どもと美術館」⁷では独自のミュージアムツアーを行っている。これまでの参加者は延べ193名（2018年9月現在）を超えた（概要は資料1参照）。「子どもと美術館」では、国公立・私立美術館を横断的に訪れて比較することにより、各美術館のコレクションの目的や性質の違い、建物と作品の融合などを鑑賞し、より多くの価値観に触れることを目的としている。また、基本的にオーダーメイドのツアーを行い、参加希望者の「年齢、興味、傾向、これまで行った美術館」の事前ヒアリングを実施し、ツアー場所と内容を組み立てている。ヒアリングは参加希望者の保護者に主に行っており、保護者が子どもの興味の方向性を考え、子どもとコミュニケーションを取ることも目的としている。

更に2018年から新たに企画した「アートブッククラブ」による鑑賞と創作ワークショップについて本稿で報告を行う。このクラブは、親子が訪れやすい地域の区民会館に出張する形式を取る、アートブックによる「移動美術館」である。低年齢期の子どもと親など美術館を訪れることが難しい層や、発達障がいの子どもの参加もできるような、インクルーシブな空間として機能することを目指している。日本でも森美術館が以前から様々な種類のインクルーシブツアーを開催し、他の美術館でも次第に取り組んでいるが⁸、更に機会を増やすために、アートブッククラブの開催を試みている。このアートブッククラブは世田谷区

【資料1】 2015～2018年度までの「子どもと美術館」ミュージアムツアーの概要（一部抜粋）

N0	開催日	展覧会名	施設名	年齢構成	参加人数	目的	内容・結果
1	2015/3/14	室麻衣子展	Bunkamura Gallery	親子3組+大人2名(叔父・叔母) (小学2年1名、小学1年1名、保育園年中1名)、スタッフ1名	8	アーティストの制作背景や制作方法を知る。実際のアーティストに会って交流する。ギャラリーの機能を知る。	・事前にアーティストへインタビューし、資料作成。 ・クイズシートを手に集中して展示を見ることができた。立体、絵画、アニメーションがあったため、楽しく鑑賞できた。 ・アーティスト本人への質問タイムも取ることができた。 ・作品に価格があることを学ぶなど、美術館と対照のツアーだった。
2	2015/4/26	常設展	国立西洋美術館	親子3組 (小学2年1名、小学1年1名、保育園年長1名、3才児1名)	8	彫刻作品を身体を使って鑑賞する。西洋美術館の成り立ちを理解しつつ、ポイントとなる作品を鑑賞する。	・彫刻の庭園で、ロダンに関するクイズからスタート。 ・館内作品は、3点鑑賞対象を定めておき、クイズしながら回った。 ・彫刻作品でポーズを取り、主体的な鑑賞から始まって、細かく作品を鑑賞しなければわからないクイズも意欲的に取り組むことができた。 ・3才児(男児)が館内の彫刻に反応し、体を丸めたりポーズをとっていたのが印象的だった。
3	2015/8/11	常設展	川崎市岡本太郎美術館 *川崎市科学館のプラネタリウムもセットの企画	親子11組+大人1名(叔母) (小学2年11名、弟妹5名)	28	岡本太郎作品に出逢い、現代アートへの興味を拓く。	・作品に自分でタイトルをつけるワークシートを行い、幼稚園生も集中して取り組むことができた。 ・参加人数が多く、年齢差も開いていたため対話型での鑑賞は難しかった。
4	2016/1/6	常設展	川崎市岡本太郎美術館 *川崎市科学館のプラネタリウムもセットの企画	親子4組 (小学2年4名、幼稚園年中1名、年少1名)	10	少人数で美術鑑賞を味わう。クイズを通して岡本太郎作品への理解を深める。	・太陽の塔に関するクイズには、年齢でまったく違った答えが見られた。 ・小学生(女児)は鉛筆で解説をメモに記入しながら、ゆっくり回ることができた。 ・小学生(男児)は自分の気に入った作品をゆっくり選び、自分の言葉でその理由を説明することができた。
5	2017/3/1	常設展	国立西洋美術館	親子3組 (中学1年1名、幼稚園年長3名、スタッフ1名)	10	彫刻作品を身体を使って鑑賞する。西洋美術館の成り立ちを理解しつつ、ポイントとなる作品を鑑賞する。	・父親3名も参加し、家族で話しながら楽しめるツアーとなった。 ・屋外の彫刻作品はメンバー全員鑑賞できたが、館内に入ると子ども達がバラバラに行動し、揃っての鑑賞が難しかった。 ・美術館に来ることが初めての子どももいたため、短時間で一作品だけに限定して鑑賞するプログラムでも良かったかもしれない。 ・来館者のレベルに合わせた細かい鑑賞設定や、スタッフ数が必要であった。
6	2018/1/6	レアンドロ・エルリッヒ展	森美術館	親子2組+大人1名 (小学3年1名、保育園年長2名)	7	現代アートとは何か、作品を通して楽しみながら考える。	・ブラインド・スケッチを始めに行ってから会場に入った。 ・専門的な知識がなくても感覚的に楽しめる展示内容が多く、現代アートに触れるのが初めての参加者も楽しめた。 ・鑑賞キーワードを設定して、作者の意図に深く触れることができるように工夫し、ポイントになる作品と一緒に鑑賞を行った。
7	2018/3/1	常設展	横浜美術館	親子2組 (小学4年2名、幼稚園年長1名)	5	抽象彫刻を鑑賞する楽しさを伝える。	・イサム・ノグチの《真夜中の太陽》を中心に鑑賞し、抽象彫刻とは何か考えながら、クイズで楽しむ形式をとった。 ・子ども達が興味を持ったのは彫刻ルネ・マグリット作《レカミエ夫人》で、タイトルと作品(なぜ棺桶で表現されているのか)の関連性を話し合った。 ・作品から物語を作る試みを行い、即興で豊かな物語が生み出された。
8	2018/6/24	小瀬村真美：幻画～像(イメージ)の表皮展	原美術館	子どものみ (小学5年2名)	2	元私邸だった美術館の展示空間を味わい、現代アートの多様な表現を鑑賞する。	・静物画の歴史や、「ヴァニタス」というキーワードに触れながら鑑賞を行った。 ・企画展だけではなく、常設作品の森村泰昌作品や、宮島達夫作品、奈良美智のアトリエを模した作品、そして館外の立体作品を楽しんだ。
9	2018/7/14	モネ それからの100年展	横浜美術館	1回目：親子2組+大人1名(保育園3歳2名)、スタッフ2名 2回目：親子2組(小学5年2名、小学1年1名)、スタッフ2名	1回目：5 2回目：5	モネと現代アートの関連性を考える。	このツアーでは鑑賞キーワードとして「ジャポニスム」「連作」「Reflection 反射・反映」「All Over 覆う」を取り上げて鑑賞を行った。混雑のためクイズをすることは難しく、解説をしながらの作品鑑賞が中心となった。

子ども基金の助成を受けて行っている事業である。

2. 先行研究等

1) ファミリー・プログラムに関する研究

ファミリー・プログラムが開催されるようになったのは、アメリカにおいても1980年代から利用者を増やすために企画されてきた側面があり、家族に関する来館者研究や理論研究は少ない⁹。大高によるアメリカの美術館のファミリー・プログラムの研究¹⁰では、参加者家族の日常体験とプログラムでの体験の関連性を、詳細な追跡調査を基に分析を行っている。結果、家族の日常体験とプログラム体験の関連性は薄かったことが判明し、家族のミュージアム・リテラシー（博物館活用能力）を上げるために必要な要素を提案している重要な研究である。大高は「家族と博物館の効果的な連携を可能にする博物館教育のあり方」¹¹について検討を行っている。本研究も多くの示唆を受け、大人が家族内教育の重要性を認識し、家族で協働できるようなプログラム作成を目指している。クロプフとウォリンズ¹²の提唱する博物館における家族プログラムの要件として、大高は以下の3つを挙げている。「学習過程で①家族の構成員が相互に学びあう機会、②個人研究を促進する機会、③学習成果である知識を他の場面でも活用できるようにする学習の転移あるいは学習効果の転移を促進する機会の3種類の機会」¹³である。本稿執筆者はこの3つの要件を満たすようなプログラム作成を目標にし、③の学習効果の転移が確認できるような追跡調査を今後実施して効果を確認したいと考えている。

阿部は国立西洋美術館のファミリー・プログラム「どようびじゅつ」に参加したその体験が、どのように作用しているか追跡調査を行った¹⁴。プログラムに参加して5年経過したメンバーに電話でインタビューを行い、時間を経てプログラムがどう作用してきたか分析している。「そこから人々の大半が創作部分を覚えていたこと、作品自体より対話を通じた鑑賞方法が大人の心に訴えたこと」¹⁵などの結果を得ていることは大変興味深い。この調査により、プログラムで制作した作品は家庭でリビングに飾られることが多く、その後の家族の会話をつなぐ役割となることを示唆している。

東京国立近代美術館では特にファミリー・プログラムとして2014年度から「親子でトーク」を企画しており、親子がプログラムの中でコミュニケーションと身体的表現を通してゆるやかに変容する様子が報告されている¹⁶。東京国立近代美術館では、親子向け、小・中学生向け、大人向けなど様々な年齢層への対話型鑑賞が行われている。また、「鑑賞教育map」¹⁷というデータベースをネット上で公開し、年齢や興味に合わせて作品を選択し、学芸員や教師が鑑賞教育の授業をする際の手助けとして機能するよう設計されている。

ファミリー・プログラムは増加しているが、その効果に関する追跡研究は少ない。美術館が個人を追跡調査することが困難で、長期的な視野にたつて家族の動向を定点的に調査する必要があるためであり、今後の課題となっている。

2) インクルーシブ教育に関する研究と活動

大高はメトロポリタン美術館における視覚障がい者のためのプログラムについて考察を行っている¹⁸。アメリカにおいては公民権法の制定や『障がいのある人の権利条約』（国連2006年12月採択、2008年5月発行）が大きく教育に影響していることなど、インクルーシブ教育の発展に重要な法的制度について言及

している。また、メトロポリタン美術館の多様な取り組みと成果を紹介している。この論文が執筆された後、日本でも障がい者差別解消法（2013年6月19日制定、2016年4月1日施行）が施行されたため、今後美術館におけるインクルーシブ教育が更に進むと考えられる。全国の美術館でも取り組みが増えてきており、触れて楽しむ彫刻の鑑賞に加え、立体化した絵画作品を手で触る取り組みなどが青森県立美術館等様々なミュージアムで行われている¹⁹。また、NPO法人「芸術家と子どもたち」は1999年に設立され、早期から特別支援学級への教育支援に取り組んでおり、音楽、美術、舞台など各分野のアーティストを学校にコーディネートする事業を行っている²⁰。本稿執筆者は、2014年にこの団体で半年間インターンシップを行った。お茶の水女子大学の産学連携研究員として参加し、実際に現場での協働体験に立ち会い多くの示唆を受けた。特別支援学校・学級と美術館教育普及との連携については、仲村が述べているように²¹、今後益々必要とされていく分野である。

3. アートブッククラブ実践報告

2018年度から新たな取り組みとして、本稿執筆者が考案した「アートブッククラブ」(以下ABCと略す)(資料2)を開催している。欧米で行われているリーディング・ワークショップ「ブッククラブ」²²をヒントに考案し、主体的な学びを制作を通して探求できるプログラムとして構成している。ABCは創作とアートブックによる鑑賞をセットにした企画であり、以下の手順で行う。

- ①アートブックによるブッククラブ。(取り上げるアーティストに関連するアートブックや展覧会カタログを使用。アンリ・マティス、ジャクソン・ポロックなど。)アーティストの生涯や作風の変遷も簡単に紹介する。対話形式で行う。
- ②アーティストの制作手法を動画や本で紹介する。
- ③実際にその手法を用いて親子で制作を行う。
- ④制作した作品の発表会を行う。

ABCは地域の区民会館へ出張し、気軽に親子で参加してもらうことを目的としている。ターゲットは美術館にアクセスしづらい低年齢期の子どもがいる世帯や、発達障がいの子ともと保護者である。「興味はあるけど子どもが騒ぐと注意されるのが気になる」「何を見たらよいかわからず疲れる」と考える保護者が多く、ミュージアムへの興味はあっても実際に行かない層は多い²³。特に発達障がい児の場合、新しい場所へ赴くことは多くのストレスとなる。アートを鑑賞する際に感動で大きな声をあげてしまったり、走ってしまったりと保護者の心配は絶えない。また、色や形がクローズアップして見える特性のある子どもは、恐怖を感じることもある²⁴。子どもの性質や症状にもよるが見通しを立てることによって心が落ち着くことが多いため、ミュージアムに行く前の予習としてABCが機能することも目的の一つである。また、定型発達児童においても、低年齢期は概ね同様の傾向(落ち着きがない、動きまわる、周囲に配慮できない等)にあり、作品を事前に鑑賞し、かつ同じ手法で創作活動を行うことによって、作品を身近に感じ鑑賞への興味が開かれると考えている。アートブックを使用することで、ミュージアムに限らず多様な空間で鑑賞を行うことが可能となる。また可能な限り図書館で借りられる絵本を使用し、ブッククラブ終了後に興味を持った親子が再度同じ本を読めるように、教育格差のないよう配慮する点も重要視している。会場にはテーマに準じた10冊前後のアートブックを用意し、余剰時間に読んでもらうことで、多角的な興味を引き出す機会を設けている(図1・図2)。全3回のABCを行ってアートへの興味を深め、2019年1月に世田谷美術館のブルーノ・ムナリー展で実際の作品鑑賞で効果を確認する予定である²⁵。今回は

【資料2】アートブッククラブ案内

アートブック クラブ

親子参加者募集!!

地区会館での開催ですので、
普段美術館に
行くことが難しい方も
お気軽にご参加ください。

ART BOOK CLUB

アートブッククラブとは…

世界のアーティストの作品をアートブックで鑑賞し、お友達とお話ししながら楽しく学びます。アーティストの作品の特徴を学んでから、その技法を使って自分でも簡単な制作を行うクラブです。最後の4回目では実際に世田谷美術館のブルーノ・ムナリー展に行き、実際の作品を見て楽しめます。

参加
できる方

世田谷区内在住のお子さん
(4歳～12歳)と
その保護者の方 合計2名

ミュージアムツアーへ参加希望の方は、より楽しく学ぶためにアートブッククラブに1回以上参加されることをお勧めします。
参加ご希望の方は、下記メールアドレスへ以下の詳細を添えてご連絡ください。

- ①参加者氏名(親子)
- ②年齢(親子)
- ③参加したい回
- ④ご連絡のつきやすいメールアドレスと電話番号

MAIL: KOTOBI@MYAD.JP

| 料金 | 各回 1000円 (親子1組の料金)

| 開催場所 | アートブッククラブ: 玉堤地区会館
ミュージアムツアー: 世田谷美術館

親子(2名1組)6組までの参加とします。先着順を基本としますが、お申し込みが多い場合は抽選とさせていただきます。
締切: 開催日の2週間前まで

主催: 子どもと美術館-KOTOBI-

代表: 宇塚 有維 (うづか ゆい)

お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科、博士後期課程にて西洋美術史を専攻。同大学に研究員として勤務後、現在は同大学グローバルリーダーシップ研究所でアカデミックアシスタントとして勤務。子どもへの美術教育普及の研究と実践を行っている。

1 2018年
7月22日(日)
10:00～11:30

アンリ・マティス
切紙絵

2 2018年
8月12日(日)
10:00～11:30

ジャクソン・ポロックの
ドリッピング
垂らしながら描く技法

3 2018年
10月14日(日)
13:00～14:30

マーク・ロスコの
にじみ絵

4 2019年
1月6日(日)
10:00～11:30

ミュージアムツアー
ブルーノ・ムナリー展
(世田谷美術館)



★マティスをテーマにした作品例



世田谷区
子ども基金助成事業

ジャクソン・ポロックの回での実施の様子を記し、その効果について考察する。

- ・日時・場所：2018年8月12日、10時～11時半、世田谷区玉堤地区会館にて。
- ・対象：7組の親子。合計21名（大人7名、子ども14名）。子どもは幼稚園年長～小学5年生まで。
- ・対象アーティスト：ジャクソン・ポロック（アメリカ抽象表現主義）

- ①ブッククラブ：最初にポロックの作品を見せた上で、絵本『オリビア』²⁶をメンバーで読みながら、ポロック作品が登場する場面を当ててもらおう（図3）。次に『ババールの美術館』²⁷でもポロックの制作方法で描く象のアーティストが登場することを示し、2つの絵本に登場する作品の制作方法の違いを観察してもらおう²⁸。ポロック作品を把握すること、身近な絵本の中にアーティストの作品が取り入れられていることへの気づきなどを目当てとした。
- ②制作方法を紹介：ニューヨーク近代美術館（MoMA）制作の動画²⁹（ポロックの制作方法）を見せ、制作方法の理解をしてもらう。次に展覧会カタログ³⁰を見せ、作品の変遷や、カンヴァスを床に置いて描くことはネイティブ・アメリカンの砂絵の制作方法からヒントを得ていること、ドリッピングやポーリング（筆やスティックに付着した絵の具を飛び散らせるにして描く手法）についてなど、専門的制作方法についても簡単に触れた。学校での制作とは違い、身体を使って表現していくことを掴んでもらうことを目当てとした。西洋美術史の基本的な歴史や常識と、ポロックの逸脱性について簡単に理解してもらおうことを心掛けた。
- ③制作開始：好きな色の絵具と用紙（A1、四つ切、八つ切を用意）を受け取り、刷毛や筆を選んで制作。制作開始後30分くらいたってから、「タイトルを考えながら仕上げていくように」と声がけを行った。作品とタイトルの重要な関係性について考えてもらうことを目的とした。
- ④発表会：作品を後方にまとめ、発表会を行う。自分の作品のタイトルとどのように制作したかを発表してもらおう。

作品例1『双子の爆発花火』(図4)は、双子（8歳男女双子）が、身体を大きく使って描き上げた。壁に飛び散るほどの絵具がダイナミックに使われた。作品例2『天の川』(図5)は、10歳女子が制作した青い色彩を中心とした幻想的な作品で「描いている内に星のように思えてきたので。」と発表してくれた。作品例3『No.4』(図6)は、5歳男子が制作した。発表会ではポロックが使用した紫色についても「本でみたことがあった。」と言及し、作品の色彩に注目していたことがわかった。彼は多くの色彩を使用した。交じり合って黒くなることはなく、大胆に制作を行っていた。足とズボンが最終的に作品と同じ色で染まる程、集中して制作していたことが印象的だった（図7）。

事後のアンケート結果：「以前このような企画に参加したことがあるか？」には全ての回答者が「いいえ」と答えている。設問「ABCへ参加して、アートへの印象はどう変化しましたか？」に対して、7家族中6家族が「美術館に行って実際の作品をみたいと思った。」という項目を選択し、アートへの興味が開かれたことが垣間見えた。また、2回のABCには全13組の親子が参加したが、11組の親子が家で作品を飾っていることが事後の聞き取り調査で判明した。制作後に家族で鑑賞し合う機会を持ち、家族の興味が継続していることが分かった。飾っていなかった2組の親子の内1組は、夏休みの自由研究でアクション・ペインティングについて調べ、見解を深めていたことも分かった。この事実が今後どのように家族の興味の方向性をひろげていくか、親と子の双方向性の家族内教育が持続していくか、今後の追跡調査が必要である。

小学5年男児による感想を一つ取り上げて紹介する。「ミュージアムツアーも本当の作品を見られるのが面白いけど、ABCの方が楽しかった。ツアーでは静かにしないとイケないけど、ABCは自分で自由に



図1 アートブック展示例1



図2 アートブック展示例2



図3 絵本読み聞かせの様子

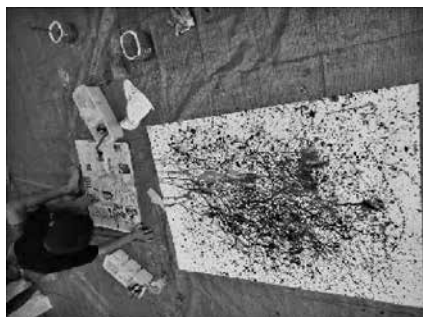


図4 作品4《双子の爆発花火》



図5 作品2《天の川》



図6 作品3《No. 4》



図7 制作後の足元

動いて作れるから。小さい子と一緒に話しながら制作できるから、その感じが一番楽しかった。やっぱり(美術館は)騒いだらダメな空間だから。』³¹この感想から、場を異年齢の子どもと大人で共有して制作することで、お互いに刺激を受けアートを楽しむ気持ちが育っていることがわかる。日本の美術館は静かに鑑賞することが基本で子どもたちには壁となっていることがこの感想からも読み取れるため、ファミリートークデーなどを利用して気軽に美術館を楽しめる環境作りがより重要になると考えられる³²。

4. ミュージアムツアー実践報告

これまで6年間活動を行ってきたが(資料1ミュージアムツアー概要リスト)、特にリピーターでミュージアムツアーに参加している児童の鑑賞能力の向上が見られる。ビジュアル・シンキング・ストラテジー³³についての平野と三宅の論文では、ナビゲータが行っている「コネクト(接続)」「パラフレイズ(言い換え)」「サマライズ(要約)」などの行為が、場を共有することで鑑賞者もその行為を行う機会が増えていくことが示されている³⁴。多くの美術館で鑑賞者の変化に関する研究報告がされているが、個人の変化が定期的に辿れないことが難しいとされている。子どもによって成長過程も違い、変化の様子を断定することは難しいが、本稿では低年齢期から一緒に鑑賞を重ねてきた子ども達の成長の一例を報告したい。

・横浜美術館「モネ それからの100年展」ミュージアムツアー

・所要時間・場所：1時間30分、横浜美術館「モネ それからの100年展」

・対象：2組の親子合計5名(大人2名、子ども3名)。子どもは小学1年生1名、小学5年生2名。

2018年7月から横浜美術館で行われた「モネ それからの100年展」では、モネとモネに影響を受けた(もしくは受けたと考えられる)アーティストの作品が同じ空間に展示されており、モネの現代への影響を視覚的にも思想的にも示す展覧会であった。子どもと美術館のツアーでは、鑑賞キーワードとして「ジャポニスム」「連作」「Reflection 反射・反映」「All Over 覆う」を取り上げて鑑賞を行った。小学5年生女兒2名(女兒Aは4歳から7回参加、女兒Bも4歳から5回ツアーに参加)と鑑賞した際に、ウィレム・デ・クーニングの《水》(1970年、国立国際美術館所蔵)について以下のような会話が行われた。

コミュニケーター(本稿執筆者)「この作品とモネはどこがつながっているのだろうね。むずかしいね。」

女兒A「(白い部分を指して)ここが川で、反射している感じかな。」

女兒B「そうそう、ゆらゆらしている感じ。空に太陽があって、こっちの水に反射して映っている。」

A「この黄色い部分は橋で。」

コミュニケーター「モネも日本の橋、太鼓橋を描いたりするね。たしかに、モネの庭みたいに見えるかも。」

B「そして黒いウネウネしたのはウナギかな? (笑)」

この会話において、コミュニケーターの具体的な誘導がない状態で、女兒Aがモネの特徴との一致をすぐ見出している。さらに女兒Bはパラフレイズを行いつつ鑑賞を深めている。上部に描かれた赤い一筆の色彩と画面中央部の赤が対比しているのは「太陽が反射しているから」という分析を行っている。2名ともモネの作品を別の展覧会で鑑賞したことがあり、その経験と知識がクーニングの抽象絵画を読み解く際に発揮されたと思われる。その後、モネ《霧の中の太陽》(1904年、個人蔵)で水面に映る太陽の色を鑑賞し、クーニング作品での連想を実際に目にし、2人の着想の源泉を確認することができた。

5. まとめにかえて

今回アートブッククラブを開催して、一番印象的だったのは、制作している時の親子が大変楽しんでいたことである。子どもたちは、ミュージアムツアーでは見られない笑顔や大胆な体の動きがあり、保護者も美術館と違い「怒らなくてもよい」空間で子どものサポートを楽しんでいた。制作に熱中して時間を忘れる子どももいれば、これ以上何を描いてよいかわからず止まってしまう子どももいて様々であった。「自由に描いてよい」と言われると、逆にどうして良いかわからずとまどいを感じる子どももあり、自発的な創造力をどう引き出していくかが今後の課題となった。ミュージアムツアーで導入としてブラインド・スケッチを行った時も、同様の戸惑いが見られた。ブラインド・スケッチは、鑑賞する前に一つの作品のイメージを言葉で伝え、イメージだけでスケッチを行ってもらうワークである。その際「できるだけ作品に近い正確なスケッチを描かねば」と考えるからか、上手く描けないことに戸惑う参加者（大人も子どもも）も見られた。「正解はないので、自分のイメージで楽しく自由に描けば大丈夫です。」と伝えると安心した様子の参加者もいた。逆に生き生きと想像した作品を描く参加者もいた。

アート作品を媒介として正解の無い問いを考え抜くこと、自由なモチーフを描くことなど、一見無意味に見られる行為の中に主体性を育み能動的に学ぶことのできる原資があるように思われる。

小学校学習指導要領が目指す「学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができる」³⁵人材を育てるためには、多様な価値観を共有できる教育普及活動が益々必要になるのではないだろうか。家族のミュージアム・リテラシー（博物館活用能力）向上によって教育にもたらされる効果は計り知れず、今後もミュージアムの内外で企画を開催し継続的に調査を行い、その効果の分析を続ける必要性がある。

注

- 1 Miyuki Otaka, “*A case study of family art programs focusing on participants’ post-program activities*”, (Doctoral Dissertation, Teachers College, Columbia University). UMI, 2007.
大高幸「家族のためのミュージアム・リテラシーとは——ニューヨーク市内3美術館の家族プログラムと参加家族の日常生活の研究から」『日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要』14号、日本ミュージアム・マネージメント学会、2010年、pp.19-28.
寺島洋子「ファミリー・プログラム 家庭と美術館における学びの連携」、『ZEPHYROS：国立西洋美術館ニュース』、国立西洋美術館、2016年、No.66、p.4.
阿部祐子「国立西洋美術館の家族プログラムの意義に関する一考察——『どようびじゅつ』の分析から」『国立西洋美術館研究紀要』2018年、22号、国立西洋美術館、pp.43-59.
- 2 「子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、これまでの学校教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要であり、我が国の優れた教育実践に見られる普遍的な視点である『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を推進することが求められる。今回の改訂では「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進める際の指導上の配慮事項を総則に記載するとともに、各教科等の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」において、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善を進めることを示した。」（『小学校学習指導要領解説』、平成29年7月「図画工作」pp.3-4より抜粋）

- 3 林有維「幼児期における鑑賞教育の必要性—日米の美術館教育普及プログラムの比較から—」『お茶の水女子大学人文科学研究』12号、お茶の水女子大学、2016年、pp.141-150.
- 4 欧米の状況については以下の論文を参考とした。
井上由佳「パブリック・プログラムのマネジメント——テート・ギャラリーの事例研究」『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』10号、日本ミュージアム・マネジメント学会、2006年、pp.27-33.
谿季江「イギリスにおけるミュージアム・サービスの動向——「学び」と「遊び」の場としてのミュージアム」『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』11号、日本ミュージアム・マネジメント学会、2007年、pp.49-56.
高橋紀子「ニューヨークの美術館教育プログラムの現在：人々、作品、物語をつなぐ回路づくり」『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』16号、日本ミュージアム・マネジメント学会、2012年、pp.47-53.
大高幸「米国における美術館教育の潮流から学ぶ」『日本美術教育研究論集』47号、2014年、pp.13-24.
一條彰子・寺島洋子「米国の美術館における鑑賞教育：所蔵作品を活かしたスクールプログラムの調査結果に基づく一考察」『日本美術教育研究論集』日本美術教育連合、No47、2014年、pp.1-12.
- 5 的場康子「育児世代の美術館・博物館の利用実態」『Life Design Report 2006年 11月-12月号』、第一生命経済研究所、2006年、pp.4-15.
- 6 仲村隆・高原章仁・田代英俊「博物館活動の効果の要因についての分析事例～親が博物館に連れて行ってくれる子どもの効果について～」『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』16号、日本ミュージアム・マネジメント学会、2012年、pp.73-79.
- 7 HPのURL：<http://www7b.biglobe.ne.jp/~kotobi/index.html>
- 8 広瀬浩二郎編著『ひとが優しい博物館：ユニバーサル・ミュージアムの新展開』青弓社、2016年。
- 9 寺島洋子、大高幸編著『博物館教育論』、財団法人放送大学教育振興会、2012年、p.155.
- 10 大高、*opcit.*、2010年。
- 11 寺島洋子・大高幸編著、*opcit.*、2012年、p.146.
- 12 Kropf, M. & Wolins, I. "How Families Learn: Considerations for Program Development" In B.Butler, & M Sussman(Eds.), *Museum Visitors and Activities for Family Life Enrichment*, New York, Haworth Press, 1989., pp.75-86.
- 13 寺島洋子・大高幸編著、*opcit.*、2012年、p.158.
- 14 阿部、*opcit.*、2018年。
- 15 阿部、*ibid.*、p.55.
- 16 細谷美宇「『おやこでトーク』—幼児と大人のギャラリートーク」『現代の目』618号、2016年、東京国立近代美術館、pp.14-16.
- 17 <http://kanshokyoiku.jp/>
- 18 大高幸「視覚に障害のある人々が美術を経験する場としての美術館：米国における社会的文脈とメトロポリタン美術館の事例から（三田芸術学会創立90周年）」『芸術学』14号、三田芸術学会、2010年、pp.5-20.
- 19 広瀬浩二郎編著『さわって楽しむ博物館：ユニバーサル・ミュージアムの可能性』青弓社、2012年。
- 20 NPO法人「芸術家と子どもたち」URL：<http://www.children-art.net/>
- 21 仲村保「特別支援学校・学級との連携に向けて～『教育普及報告書』にみる過去の取組とこれからの課題～」『沖縄県立博物館・美術館 美術館紀要』、第5号、沖縄県立博物館・美術館、2015年、pp.42-51.
- 22 対話の中で主体的に学ぶ力が求められる。T・E・ラファエル、L・S・パルド、K・ハイフィールド著、有元秀文訳『言語力を育てるブッククラブ：ディスカッションを通じた新たな指導法』ミネルヴァ書房、2012年。
- 23 細谷、*opcit.*、2016年、p.16. 参加の動機としてアンケートに「普段は子連れで美術館にいきづらい。」と書く保護者がおり親子連れは歓迎されないと感じていることに触れている。
- 24 発達障がいの傾向にある子ども（4歳）と草間彌生展にプライベートで出かけた際に、目が沢山描かれた作品を怖がってパニックになりかけた事があった。ゆっくり鑑賞できなかったが、後日、本屋でカタログの表紙を見て「これ、草間さんだね。」と指摘するようになり、その後草間作品に強い興味を示すようになった

幼児期からの美術鑑賞教育の実践と効果について

例がある。

- 25 ミュージアムツアー参加者には、効果を確認するためにABCへ1回以上参加してもらっている。
- 26 イアン・ファルコナー『オリビア』谷川俊太郎訳、あすなろ書房、2001年。
- 27 ロラン・ド・ブリュノフ『ババールの美術館』せなあいこ訳、評論社、2005年。
- 28 『オリビア』では主人公のオリビアが壁に作品を描いているが、『ババールの美術館』では床にキャンバスを置いて制作する様子が描かれており、ポロックの制作方法を特徴的に描いている。
- 29 MoMAが作成した動画を使用した。“How to paint like Jackson Pollock – One: Number 31, 1950 (1950) | IN THE STUDIO”
- 30 『ジャクソン・ポロック展：生誕100年 = Jackson Pollock : a centennial retrospective』愛知県美術館、東京国立近代美術館、読売新聞東京本社文化事業部編、読売新聞東京本社、c2011-2012。
- 31 第2回ジャクソン・ポロックABCのアンケートより抜粋。
- 32 東京国立近代美術館工芸館、町田市立国際版画美術館、三菱一号館美術館、戸栗美術館、神奈川県立近代美術館（葉山）などがフリートークデー、もしくはファミリー・コミュニケーションの日などを導入している。
- 33 対話型鑑賞法の一つ。
- 34 平野智紀・三宅正樹「対話型鑑賞における鑑賞者同士の学習支援に関する研究」『美術科教育学会誌』36号、美術科教育学会、2015年、pp.365-376.
- 35 『小学校学習指導要領解説』、平成29年7月「図画工作」、p. 3.

【謝辞】

子どもと美術館の企画にご参加くださった皆様、支えてくれたスタッフの皆様にご挨拶いたします。